

伊丹公論

復刊
第2号
通巻第21号

発行所 伊丹市立図書館ことば蔵
伊丹市宮ノ前374
☎0727848170
発行日 平成25年10月31日
編集 伊丹公論編集委員会

特別寄稿
新連載

清酒発祥の地で460年 小西酒造社長が歴史語る

伊丹市の清酒普及条例が、「日本酒の日」の10月1日に施行された。正式には「清酒発祥の地伊丹の清酒の普及の促進に関する条例」という。これに合わせ本紙は、全国でも屈指の1550年創業という、伊丹の代表的な老舗、小西酒造の歴史を小西新太郎・社長の特別寄稿により今号から4回にわたり特集する。伊丹で薬種商として創業した小西家は、江戸時代に酒造業で発展し、町政にも関わる実力者となった。伊丹のまちは小西家を抜きには語れない。社長が語るビッグな企画を楽しんでいただこう。

賢人は歴史に学ぶ

歴史ある「伊丹公論」が復活されたとお話を伺い、市立図書館『ことば蔵』の開設と共に新しい動きを感じることができ、大変うれしく存じます。

そのお知らせをいただいた時に、過去の伊丹公論に岡田利兵衛先生が「伊丹の酒造業」というテーマで寄稿されていたので、是非「伊丹老松」の武内さんと私に伊丹の酒造業に関する寄稿をして欲しいとの

要請が参りました。

私は経営者ではありませんが、歴史学者でも古文書研究家でもございませんので、諸先輩方に教えていただいたことを私なりに解釈して文章にすることはできますが、歴史を正しく後世に伝えるとの役割は果たせませんとお伝えしたところ、それで結構ですとのことでしたのでお引け受け致しました。「愚人は経験に学び、賢人は歴史に学ぶ」ということのほんの少しでも文章に出来ればと念じて筆をとらせていただきました。暫く拙文にお付き合いただければ幸いです。

第一回のテーマは、「小西家の歴史」と致しました。私を含めての話ですが、他人の家の歴史を語られても面白くもおかしくもないと思いますので、皆様に少しでも興味を抱いていただけたら幸いです。口で話を進めて参ります。

源流は丹後の武士

小西家の歴史は現在の京都府峰山町小西の地に、室町時代後期に砦を構えた小西石見守を源流としますが、ここでは伊丹との関連がございませので省略させていただきます。小西家の始祖は、1550年(天文19年)に伊丹において薬種商を営んだことから始まったと言われております。現当主は14代小西新右衛門ですが、過去すべての当主が新右衛門(ちなみにこの「衛」は「衛」ではありません)を襲名しておりますので、その区別が付きません。そこで新右衛門の名前の後に業広(ぎょうこう・10代)、業茂(ぎょうも・11代)、業精(ぎょうせい・12代)、業雅(ぎょうが・13代)そして当代は業輝(ぎょうてる)を名乗っております。過去からの歴史的な部分もあり、現在も襲名が許さ

れておりますので、戸籍上からも名前を変えることができます。

最初からではなかったと思いますが、長男が生まれると「新太郎」、長じて「利右衛門」、家督を相続して「新右衛門」になると聞いております。

名は中国古典から

この460年以上の小西家の歴史を支えてきた一つの制度が一定の年齢になると後継者に事業(家督)を譲る隠居制度であったと考えられます。私は、代々当主がどのような考えで「新右衛門」後の名前(諱)を付けたのか大変関心がありまして。先々代の業精は、文武両道に長けており、我々兄弟の名前もすべて中国の古典から引用して名づけたと聞いておりましたので、どうか大変関心がありました。ある時中国の古典本を見ておりましたら、「莊子・外篇」に「衆人(しゅうじん)は利を重んじ、廉子(れんし)は名を重んじ、賢人は志を尚(たつと)び、聖人は精を貴ぶ」という言葉を見つけました。私は業精の「精」はここから取ったのだと確信致しました。その時初めて「精」とは、「人の動きが何ものにもとらわれず、生来の純粹さを保っていること」を意味することを知りました。言葉の意味の重要性を改めて知った時でもあります。小西家は代々中国の古典を読んで勉強してきたようですが(残念ながら私はできておりませんが)、いつの時代にも普遍的

ことを追求する気持ちを持続したいと思っております。

出身地名を苗字に

次に武士であればいざ知らず苗字帯刀が許されていなかった時代から、何故「小西」という名前を名乗っていたかであります。ご高承の通り昔は商人には苗字を名乗ることが許されておりました。そのため、初代は薬屋新右衛門と呼ばれておりました。苗字を付けることが許されるようになった時に、元々の出所である峰山の「小西」から、付けられた

郷土史
こぼれ話

歌人の水牧山若 旅と酒の歌 伊丹での一夜

秋の気配が近づくと、「白玉の歯に染みとおる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり」(若山牧水1885〜1928)の歌が、口を出る。

明治の終わりが、牧水は早稲田時代の歌友、桐田露村(豊中市石橋)の案内により伊丹で一晩を明かす。現在のJR伊丹駅近くの料亭で、初めて白雪を飲む。相手をした芸者に得意の声色を披露したという。芸者の名は扇花といった。

一年後に、誰かに似ていませんか、と牧水は絵はがきを寄越す。扇花に似ていたと露村は追悼(君を懐う)する。牧水の伊丹の一夜は、さぞ楽しかったのだ

のは想像に難くありません。また次回以降に述べますが、伊丹が近衛家の所領であったという事実も、剣道やなぎなたを育んできた道場である「修武館」の由来でもあります。第一回の本稿が、取りとめもない小西家の歴史の一部の話しを通じて、歴史を紐解く面白さにつながれば幸いです。最後に次回以降のテーマを記させていただきます。

【次回以降の連載予定】

第二回 伊丹と酒造業の歴史
第三回 古文書から見る酒造業
第四回 近代に果たした伊丹(小西家)の役割

あろう。大正3年の初夏、露村は、結婚祝いに「白雪」を小西の酒蔵から送った。牧水は、大正5年、朝の歌(若山牧水集)の中で銘酒白雪を送らむといふ便り来る「津の国の伊丹の里ゆはる」と、白雪来るその酒来る「手に取らば消なむしら雪はしけやし この白雪はわがこころ焼く」(長寿蔵前碑)など7首を作って感謝した。

人には飲まずのが惜しいので少し飲ませたあとは、他の酒を飲まずのだと、露村に白雪讃酒歌を便りしている。

酒豪の牧水は、体調の良いときは1日3升5合、それもちびりちびり火鉢で燗をして、1日かけて飲む。「それほどにうまさかと人のとひたらば」と答えるこの酒の味「足音を忍ばせて行けば台所に 我が酒の瓶は立ちて待ちをる」と、酒と旅を生涯心から愛して、名作を数々残し43歳で死んだ。(郷土史研究家 森本啓一)

平成の大発見！伊丹城の堀現る

今夏、市教委では共同住宅建設に伴い、“有岡城跡・伊丹郷町遺跡第352次調査”を実施しました。当地点は、国指定重要文化財「旧岡田家住宅・酒蔵」・県指定有形文化財「旧石橋家住宅」の真南、小西酒造(株)の「長寿蔵」の真北に位置し、江戸時代には2軒の酒蔵で、近代に入ってから「由多加織」の工場だった場所です。調査において特筆すべき点は、予想していなかった“堀”が発見されたことです。そしてその堀は、有岡城期の町割りに合致するような方向でなく、西に少し振ったななめ方向(〓)に掘られたもので、幅

約3m×深さ1.5mで38m以上あることがわかりました。過去の調査において、惣構の有岡城の中に、無数に堀が掘られていたことがわかってきています。今回の堀は、有岡城の町割りの方向や軸と合致せず、また、堀を埋めた直上に、有岡城期に建てられたと考えられる建物跡が見つかったため、この堀は伊丹城期に掘られたものではないだろうかと推察しています。今後の資料整理に期待下さい！

有岡城が置かれた伊丹

「伊丹」は、鎌倉時代以降、在地領主「伊丹氏」の支配地域で

あり、京(西宮)兵庫津以西を結ぶ山陽道と、大坂(有馬)を結ぶ有馬道の結節点(交差点)で、非常に重要なエリアであるため、度々、時の為政者に振り回され、そして戦の場となりました。室町時代末期、池田城主・池田氏に仕え、自ら主君を倒し、織田信長の配下となっていた荒木村重が、天正2年(1574)、伊丹城を攻撃し、伊丹氏を追放します。以後、伊丹城を《有岡城》と改名し、本城とし、尼崎城・花隈城を支城とし、また兵庫津など沿岸部も守備しながら、摂津守“とし摂津国内をおさめていきます。有岡城は、猪名川の西に位

置する伊丹台地の段丘上に構築されています。主郭(城)の背面は段丘崖で、その崖下には湿地帯が広がるため、騎馬では攻め込めません。有岡城は、『信長記』に「城と町の間二侍町御座候」とあるように、侍町の外側に広がる町を抱き込んだ、《惣構》構造をもつ城の初現として広く知られています。城オモテに広がる町の北・西・南端の三方に砦が配置されました。本丸―岸ノ砦―上臈塚砦―鴨塚砦を繋ぐ《惣構》の規模は、南北1.8km×東西0.8kmとなります。(伊丹市教育委員会事務局社会教育課)

伊丹城期に造られたとみられる堀跡＝伊丹市中央



現代人物風景 和田久代さん 200年の伝統つなぐ



日本の三大私設道場のひとつとして知られる修武館。20年以上の伝統を誇るこの道場でなぎなたの稽古に励む和田久代さんは、戦後の道場復興期に参加した、いわば最古参メンバーのひとりだ。

なぎなたに出会ったのは中学生の頃。たまたま誘われたのをきっかけに友達3人と道場に通い始めた。現在の場所(西台3丁目)に道場ができるまでには、練習する場所がなくてあちこちを転々としたこともあった。「立派な道場ができた時は本当にうれしかった」と、当時のことは今も記憶に残っている。

結婚後しばらくはなぎなたから遠のいていたものの、子供が大きくなってからはふたた

び友達に誘われ道場に通い出した。一緒になぎなたを始めた3人は50年以上たった今も元気に道場に通っている。はじめの頃は「連れて行かれてしょうがなく始めた」というものの、気がつけば人生の長い時間をなぎなたとともに過ごしている。今では「和気あいあいと仲良く健康で、みんなが稽古に來られることは幸せだと思う」と柔和な笑みをみせた。

試合に出ることはなくなったものの、昔より熱心に稽古に來ているのだそう。取材当日はちようどお盆明けだったのだが「やっぱり道場になると声も張るし、緊張感がある。家で雑用をしているよりいいかも」と語った。若い頃のように体は動かないけど体の開きや手の動き

等を、あぁじゃないこうじゃない、だめだなど思いながら演武の練習に励んでいる。「型」は精神修行であり、それを探求するなかで、なぎなたがおもしろくなってきたのだそう。

「ちよつと運動しに來た」というようにマイペースで控えめな印象の和田さんだが、なぎなたを通じて「集中力が身についた。踏ん張り、我慢ができるようになった」と語るように、キリッとした目元からは奥に秘めた芯の強さ、ピンと張った背筋からは若さを感じられる。しなやかさと強さが同居するその姿は、さながらなぎなたの精神を体現しているようだ。これからも道を探求しながら、その精神を後輩たちに伝えて欲しいと思う。(永井純一)

元おかみの 気まぐれ コラム 追いかけてやった

嘘のような本当の話です。昭和48年頃だったと思う。たびたび來られた男の客がお酒を独りで飲んでいたと思うと、いきなりカウンターに片足を上げた。何をするかじつと見ていたらどうも飲み代がなかったらしい。脅して飲み代を払わないつもりだったらしい。私は膝ががくがくして止まらない。ままよとグラスにお酒、いわ

ゆるコップ酒、一気に飲むとなんと膝がびったり止まった。気持ちも落ち着くと、だんだん腹が立ち、払わずに帰った男を追いかけた。店員さんと2人で。その頃は着物に白いエプロン姿、もちろん白足袋に下駄、どちら共なく足袋跣で100メートル位追いかけて土下座をしてもらった。今は1メートルも無理。当然の事支払いは貰えない、がまあいいか土下座を貰ったので。今思うとよくそんな事をしたと。やっぱりお酒やね、お酒で足の震えが止まったし。今その道路は広がっている。恥ずかしい事でした。(平きみえ・昭和39年から40年間伊丹で営業していた居酒屋「浜路」の元おかみ)

老舗
探訪

宮ノ前に海の香り

引き戸を開けると、海の香りがした。最高級の鰹節を厳選仕入し、加工販売している。卸先を尋ねると、伊丹の名飲食店がどんどん出てくる。食の「影の立役者」だ。

昭和元年（1926年）に創業し、4年後に現在の猪名野神社の側に移転した。経営しているのは4代目の高木伸也さん。鰹節は鹿児島や焼津などの名産地から仕入れ、鰹以外にもサバ節なども取り扱う。一番の売れ筋は数種の削り節を「独自にブレンド」したもので、それぞれの風味を熟知してこ

そのオリジナル商品だ。

先代の晃さんからも話を伺うことができた。戦前から戦後にかけてはアイスクャンデーも販売していたそう。出汁に使う鰹節の消費は、冬は多いが夏は落ち込む。それを補うためのアイデアだった。

掲載写真は「これを使ってください」と、伸也さんがiPhoneを使ってその場で送信してくれた。アイデアもテクノロジも取り入れながら、常に進み続けた結果としての伝統が、この店にはある。（満田弘樹）



荒牧バラ公園

平成
いたみ
八景



バラは何となく西欧の香のする花である。実際バラを国花とする国はイギリスなど西欧を主体に11ヶ国もある。しかし現代の園芸品種のもとになったのはアジアに分布する8種が原種であると言われている。その中には日本の野茨・照葉野茨（てりはのいばら）・浜梨（はまなす）も入っている。

平成4年4月29日にオープンされた荒牧バラ公園には、1.7ヘクタールに世界のバラおおよそ250種1万本のバラが植栽されている。その中には市内の寺西菊雄氏が作出された、香り高い「天津乙女」や高貴な「マダム・

空中戦を制すには「高度を高くとること、スピード、そして太陽を背にすること」が必須です。アメリカを始めとする連合軍の司令部が「雷雨とゼロに遭遇した時は戦うな！」と命令した程、零戦は、小回りが利き、急旋回や宙返りで相手の背後に立つのが得意でした。ある日、山本五十六の護

衛戦闘機の生き残りで、空戦の神様と言われた杉田庄一（飛曹が私の上官として着任してきました。酒と女が大好きで豪快な熱い男でした。なぜか私は彼に気に入られ、杉田上官は1番機、そして私は常にその列機をつとめました。杉田上官からは「絶対に編隊を崩すな」「撃つときは敵のパイロットの顔が見える距離まで接近すること」「絶対に深追いはするな」と叩き込まれました。私が最後まで敵に撃たれずに済んだのはその教えを忠実に守っていたからだと思います。昭和19年11

月末、連合艦隊が壊滅し日本海軍は腕利きの搭乗員を集め精鋭部隊343航空隊を結成しました。米軍式にいうと5機撃墜で「エース」、10機撃墜で「ダブルエース」といいます。この部隊はダブルエース以上の集まりでした。杉田上官は120機撃墜の超エース、そして64機撃墜した「天空のサム



ライ」として知られる坂井三郎中尉もこの部隊にいました。その主力は「紫電改」。この飛行機がすばらしかった。優秀な当時世界ナンバー1の戦闘機やっと思

います。鹿屋（鹿児島）にいた昭和20年

4月15日、出撃撤退の報が遅れ、離陸してすぐの杉田上官の1番機が敵機に撃墜されました。その時、私も離陸寸前でしたが、整備員が車輪止めを外さずに避難したため、離陸できず、そのため生き延びる事ができました。常に死と背中合わせの毎日、死ぬことと生きることは紙一重でした。

聞き書きの昭和史 空から見た太平洋戦争（下）

元零戦・紫電改
搭乗員 笠井 智一

私が生き残ったのは、ただただ、運が良かったからだと思えます。「死」というものの恐怖は全くありませんでした。親が兄のような杉田上官が亡くなっても、朝食と一緒に食べた15人の仲間が、夕食時には5人に減っていても、特攻隊の若者を見送っても、仲間が

目の前で撃墜されても、悲しいという気持ちは全く湧いてきませんでした。「次は俺の番や！」と思

いながら、とにかく、「アメリカに勝ちたい！グラマン機を撃ち落としたい！」と、毎日それだけ考えていました。

した。司令官は集まった30人程の仲間に「集まってくれて感謝する。しかし、下士官のお前らは、これからがある。死んだら終わりだ。故郷へ帰り、必ずお召しがあるからそれを待て。」と言われ

ました。最後のお召しは、ついにきませんでした。

同期の内、80%が特攻や空中戦、地上の爆撃で戦死。343航空隊で生き残っているのは今では私一人になりました。戦死した同僚に満足して死んで行ったのかどうかを聞く事はできません。しかし、今頃になって「あの戦争は間違っていた」と幹部がいうのを聞くと腸が煮えくり返ります。そんなら、多くの人が亡くなったこの悲惨な戦争はなんだったのか？

私のできることは、「こんな悲惨な戦争は二度と起こしてはいけない」そのことを命ある限り伝えていくことやと思っています。（村上有紀子）

ビオレ」などもある。

又、国際友好都市のベルギーのハッセルト市や中国の仏山市から贈られたバラ・コーナーもある。広々とした芝生広場の東側を水の流れに沿って登って行くと市民の寄付金で建築された赤い3本の柱―「平和モニュメント」がある。

これは過去・現在・未来を表現し、自由と平等・人類愛を象徴しているとか。「ブルー・ローズ」とは「不可能・あり得ないこと」を意味するが確かに青いバラは存在していなかった。最近パンジーの青い色素を作る遺伝子を組み入れて青いバラが誕生

したと報じられているが、まだ紫がかっておりすっきりした青色とは言えない。其のうちに伊丹市ですっきりした青いバラが誕生することを夢見たい。

公園では年中バラが咲いているがやはり見頃は5月6月と10月11月だ。この美の空間に魅せられて市外からも鑑賞に大勢訪れる。荒牧バラ公園は市民が八景に選んで当然だ。

（アピールプラン推進協議会会長 山元龍治）

次回は「伊丹版―哲学の道（伊丹緑道）」を紹介予定

「伊丹の甘い一日」 ちょこリンピック開幕

伊丹市内の和洋菓子店のチョコレートデザートが並ぶ、ビュッフェイベント「伊丹ちょこリンピック2014」が来年1月21日に開かれる。今回で8回目。毎回、多くの応募者があり、参加するのが難しいイベントなのとか。なぜ、伊丹で「チョコレート」のイベントなのか？

伊丹市はベルギー・ハッセルト市と姉妹都市だが、ベルギーと言えば「チョコレート」。ならば、「伊丹をチョコレートのまちに」というのが始まり。今ではが多くある伊丹の食のイベントの先駆けといえる。

当日は、市内に点在する和洋菓子店が一堂に会する滅多にない機会ということもあり、また、イベント限定のスイーツもあり、会場はビュッフェスタートを、今か今かと待つ紳士淑女でヒートアップ。

昨年度は、チョコレート味のビール、抹茶や健康茶、抽選会も行われ、盛りだくさんの内容だった。2時間の夢のひと時は、あっという間に過ぎていく。

伊丹俳壇

坪内稔典選

◎最優秀賞

おなかまんまる生まれてくる子も柿好きに

渡邊美保(伊丹市)

江戸時代には、結婚するとき、実家から柿の枝を持参、その枝を嫁ぎ先の柿に接ぐ習慣があったそうです。女性はその柿の木と共に生き、亡くなると柿の枝を火葬の薪やお骨を拾う筈にしました。詳しくは拙著『柿日和』(岩波書店)をどうぞ。伊丹の柿といえば台柿ですが、この句、台柿のような大きな子が生まれそう。

◎優秀賞

ことば蔵台柿置いて受付に 織 扇宮(伊丹市)
採用のはっきり決まり柿を食う 小松房子(伊丹市)
柿喰いて西国街道一人旅 図子利明(伊丹市)
朗読に耳を澄まして柿の空 藪ノ内君代(京都市)
孫が来る算数予習木守柿 遠山英樹(伊丹市)

「伊丹公論」名物コーナーの「伊丹俳壇」。「伊丹公論第21号」の発行は「秋」ということで、今回の兼題は「柿」となった。今回も数多くの応募があり、遠方からは、京都市や奈良市、大津市からも応募があった。また、9歳から88歳と今回も幅広い世代からの応募があり、今回も俳句への関心の高さが伺えた。

「伊丹俳壇」次回の兼題は「正月」。

募集期間は12月3日から12月17日の予定。問い合わせは「ことば蔵」交流・貸室担当 ☎072・784・8170

酒の歴史伝える

郷土土産品紹介

樽廻船の巻



「樽廻船(たるかいせん)」とは、江戸時代に、主に上方から江戸に酒荷を輸送するために用いられた船である。

当時、伊丹の酒は、下市場(現在の神津大橋周辺)または雲正下(同JR伊丹駅北側)から高瀬舟に積出し、猪名川を下り神崎の浜へ送り、そこから海路江戸へ廻送されていた。

角樽(つのだる)をイメージしたパッケージを紐解くと十勝産の銘の中に大粒の栗が一つ入っている。あつさりとした甘みの上品な和菓子だ。

製造・販売を行う福住は、昭

図書館 蔵出し ニュース

「本と出会い、言葉を交わす公園のような図書館」というコンセプトで、市立図書館ことば蔵がリニューアルオープンして1年3ヶ月が経った。この間、さまざまな催しや市民イベントが開催され、また市民参加の部活動も生まれている。

中でも「カエボン部」は、誰でも気軽に参加してもらえる部活動だ。図書館1階に設けられた「カエボン棚」で、利用者同士がお互いに本を交換する。感想やメッセージを書いた手作りのオビを付けて棚に置き、他の誰かが持ってきたお勧めの本と交換するという仕組みで、開館当初、数冊からスタートしたが、今では、蔵書200冊を超えている。

月に1度の部活動では、7〜8名ほどが集まり、テーマに沿った本を紹介し合っている。参加申込や部員登録は不要で、毎回違う顔ぶれの参加者が、自分が持ってきた本の感想やその本との出会いのエピソードなどを紹介し合い、お互いの人柄を知り、手に取るこ

一冊の本が人をつなぐ カエボン部へようこそ

とのなかった「本」を知るきっかけとなつている。

新刊本や流行の本は、新聞やインターネットの書評で知ることができ、カエボンの魅力は、身近な誰かの思いをきっかけに、意外な本と人の出会いが生まれること。一冊の本を通じて、見知らぬ人同士が会話し、お互いに親近感を感じることができ、そんな「本」が持っている「人をつなぐ力」を実感できる部活動だ。

今後は「カエボン棚」をまち中の施設や店舗にも広げて、市内



全域で本を通じて人が交流できればと思う。(ことば蔵カエボン部部長 三鼓由希子)

酔後録

ときわ喜多



▼霜月
その昔、バラクーダというパンドの「日本全国酒飲み音頭」という歌がはやった。「1月は正月で酒が飲めるぞ」から始まり、

「2月は豆まき」「3月はひな祭り」など、毎月何かしらの理由をつけて「酒が飲めるぞ」とつなげる。しかし、11月はこれといった行事もなく、「11月はなんでもないけど酒が飲めるぞ」という歌詞だ。

この「伊丹公論」第21号は10月

31日発行。さらに日本酒が美味くなる時期だ。11月はなんでもないけど…仕方ない、飲むぞ！11月は霜月か…爛だな。

▼あて
乾杯編で書いた「ATEE1グラブ」でグランプリ作品を取った「いかのエスカベージュ」を食した。なるほど、なるほど…ぜひ、みなさまもこの店を探して食していただきたい。ヒントはJR伊丹駅近くの目出度い店名…

▼酒と本
折角、ことば蔵で出す新聞なので本の話も一つ。酒の出でくる本は多いが、かの有名な夏目漱石の「吾輩は猫である」にも登場する。「久し振りで正宗を2、3杯飲んだら、今朝は胃の具合がいい。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。」…そうか、胃の具合がよくなるんだ。では、もう一杯。



林やよい…伊丹市在住。大学4年生の息子、20歳の娘の母。毎日新聞阪神版にイラストエッセイ「くるまいすまいる」を連載中。